

# 理事に就任して

(株) ダイヤコンサルタント 東北支社長  
齋藤 勝



## はじめに

平成30年4月から(一社)東北地質調査業協会の宮城県理事を拝命しております株式会社ダイヤコンサルタントの齋藤です。学生時代を過ごした仙台におよそ30年ぶりに戻ってまいりました。当時を振り返ってみると、現在の仙台は、街の雰囲気はほぼ同じですが、街路樹が一層生い茂ったように思います。この仙台で初心に帰り、東北の発展のために貢献していく所存ですのでよろしく願いいたします。

## 歩んできた道

昭和36年、栃木県的那須町に生まれ、地元の小・中学校に通いました。中学校卒業後、白河の関を越え福島県の高校に進学しました。当時、栃木県から福島県に通う高校生は稀でした。おそらく今もそうだろうと思います。通勤客も少なく、利用していた列車はいつもがらんとしていたのを記憶しています。車両の床、背もたれは主として木製でかび臭く、いつも木枠の車窓を眺めていました。黒川の鉄橋を越えると福島県で、下り線にはトンネルがあり、上り線にはトンネルがありませんでした。なぜ越境したのかは諸説ありますが、もっとも大きな理由は乗り換えもなく一本の列車で通学できるという利便性ではなかったかと思います。ちなみに、私が利用していた駅の2つ南側にある黒磯駅は、交直流の境界で、普通電車の始発・終着駅となっております。そこから先へは乗り換える必要があります。

大学はさらに北上し、宮城県の大学に入学しました。そこでは地質学・古生物学を学び、卒論は栃木県にある高原山周辺をフィールドとして地形、地質、産出化石、地史をとりまとめました。グリーンタフ層準が主な調査対象でした。大学生活は遠い記憶となっていますが、入学した昭和55年の夏は、晴れたのが3、4日で、気温30℃を超えた日はなかったと

憶えています。また、冬は大雪で送電鉄塔が送電線の着雪で倒れ、年末に停電しました。卒論のフィールドは、地形が険しく、やぶが多く苦労しました。

指導教官の紹介で入社した株式会社ダイヤコンサルタントでは、送電鉄塔を新設する際のボーリング調査、地すべり調査、のり面調査、トンネル掘削のための調査、水文調査、温泉調査、ダム地質調査、ダムの堤体材料試験、液状化層のトレンチ調査、活断層調査などに従事しました。また、6年間、(一社)関東地質調査業協会にて技術委員を務めておりました。活断層調査では、北武断層(神奈川県)、安居山断層(静岡県)、MTL紀伊(和歌山県)、野島断層(兵庫県)、曾根丘陵断層(山梨県)などの断層を対象として実施しました。観察した例を図-1に示します。例は富山県で調査したものです。

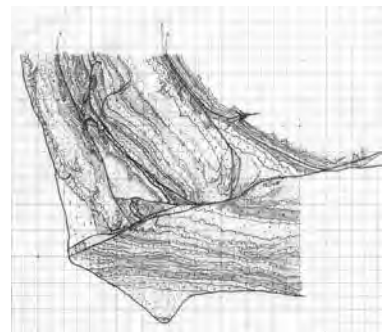


図-1 断層を観察した例(法林寺断層)

## 地質調査業の社会貢献について

社会に目を向けてみますと、いかなる企業も社会貢献が求められています。あるいは、事業を展開していくうえで、社会に貢献することは、自発的な責務なのかもしれません。地質調査業にもその目的に即した貢献と、事業所のある地域に根ざした貢献とがあると思います。

全国地質調査業協会連合会のホームページによりますと、地質調査は、「地質、土質、基礎地盤、地下水など地下の不可視部分について、地質学、地球物理

学、土質工学などの知識や理論をベースに、地表地質踏査、物理探査、ボーリング、各種計測・試験などの手法を用いて、その『形』、『質』、『量』を明らかにする。」ことと定義されています。また、明らかにする目的は、学術分野、資源開発分野、建設事業分野の3分野に分けられています。これまでの経験からいえば、これらの分野の目的に即した社会貢献としましては、学術的分野では、自然に関する知識を深めて、社会に活かすため、地震などの自然現象や未知の世界の状況や因果を研究者が追求する上で、的確な助力をすることではないかと思えます。また、資源開発分野では、社会に有用な地下資源を開発するために、地下資源の「形」「質」「量」を把握して、経済的かつ正確な情報をもたらすことだろうと思えます。さらに、建設事業分野では、国土の開発や保全、社会資本の整備、維持、防災、減災に関して、地盤に関する的確な情報を提供することだと確信します。全地連のHPにありますように、情報を、歩く、探る、掘る、測ることで収集し、整理して分析し、提供するのが地質調査業の仕事であるとされます。自然に向き合い地道に調査することです。情報を提供する際は、役に立つ資料とするため、報告書を章立てしたり、概要版、本文、資料集に分けるなど階層化し整理することが必要です。その過程では分析能力やとりまとめる力が問われます。

### 組織について

我々は業務を遂行し情報を取得し、とりまとめる際、組織的に活動しています。組織は、それをとりまく環境の多様性と同じくらい多様性を持たなければなりません。また、環境に適應するため自らの多様性を管理する必要があります。さらに、組織が多様性を持ち、機能するためには、要素間のつながりがなければならぬのですが、つながりが強すぎても、不安定化し機能しません。人のつながりもそうです。階層化した組織の下位階層に自律性を持たせるとよいのですが、その運営は微妙なバランスで保たれ、方法論としての決定打はないようです。そこが難しいところでもありますし、おもしろさを含むところかもしれません。

### 役割を果たすこと

人にはさまざまな生き方がありますが、私は後悔しない生き方を歩みたいと考えています。つねに社会や組織におい

て自分が果たすべき役割を考え、役割をまっとうするそしてそれらに貢献することを基本としたいと思います。それは、人に誇るのではなく、縁の下で支えることであると思えます。建築家の隈研吾氏は「突出し、勝ち誇る建築ではなく、地べたにはいつくばり、さまざまな外力を受けながら、しかも明るい建築」を目指しました。今年、島根県、大阪府、北海道で被害地震、西日本に7月豪雨災害、21号台風などで高潮が発生するなど、自然災害の多い年でした。近ごろ、地球温暖化が叫ばれ、異常気象が多くなるとの予測もあります。水害には砂防堰堤や堤防などを強固にして確実に災害を止めることが重要です。一方、洪水や土石流災害に備え、予め危険箇所を既知とし、迅速な避難ができるようにするなどのソフト対策も大切です。いかに自然に向き合うか、我々の基本的姿勢も問われます。業務を進める上で一面的な見方だけではなく相補的な面もあることを認識し本質にせまり役割を見つけていく。その過程では隈研吾氏の設計思想も参考になるのではないかと思います。私は地質調査業務の前線で活躍する人々を支えるとともに、整備されていく社会資本の礎の一部として貢献したいと考えています。

### おわりに

岩手県の山中を踏査しているとき、互いにジャマのようで、寄り添って精いっぱい生きているくされ縁的な針葉樹と広葉樹を見つけました。利点といえば支え合っているのも風強いことではないかと思えます。ただ、気になるのは少し摩擦のあることです。

これらの木ではありませんが、自分の置かれている立場を客観的に見つけ、業界の発展のために精いっぱい努力して参りますので、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



図-2 支え合う木(岩手県)